SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

統辞論と文体論の境界：A.Martinet氏の書評に答えて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅野, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000436

統辞論と文体論の境界
― A. Martinet 氏の書評に答えて ―

浅　野　幸　生

筆者がこれまでとり組んできたテーマの一つに文型の使い分けの問題がある。同じ環境に現れうるいくつかの文型から、話者がどのような動機を持って特定のものを選択するのかを、機能主義理論の枠内で説明を試みようとしたのであるが、意外なことにこの種の研究はこれまであまり行われてこなかった。言語の運用について理解するためには欠かせない側面であることを考えれば、文法記述の一部―それも極めて重要な一部―として扱われるべきであろう。

不当な扱いを受けてきた理由は二つ考えられる。一つは言語理論そのものの成り立ちに関わるもので、もう一つは他の分野との境界画定に関するものである。本稿では、これら二つの障害がいかなる性質のものであるのかを再考し、この問題が統辞論のまさに中心に据えられるべきものであることを改めて主張したいと思う。

0. はじめに

古代における言語研究は、狭義の文法研究と修辞学に分けることができる。前者は理論的ではあったが対象が専らギリシャ語とラテン語に限られていたし、後者は分析よりも実用面に顔を向けていた。

言語研究の萌芽は古代ギリシャに見いだすことができるが、紀元前5世紀に当時の哲学者たちが先ず問題にしたのは言語記号（音声）とそれが指し示すものの関係―それらの関係が必然的なものであるか慣習的なものであるかということ―であった。プラトンの著書の中にも現れるこの問題は、遙か後20世紀の初頭になってF. de Saussureから「記号の恣意性（arbitraire）」という名称を与えられることによって言語学における重要な概念として蘇った。このような言語に関する哲学的な考察は、その後のアナロジスト（言語は本質的に規則的なものであると見なす立場）とアノマリスト（不規則性こそ言語の重要な側面であると考える立場）の対立に受け継がれてゆく。

いわゆる伝統文法（grammaire traditionnelle）の原型は、紀元前3世紀頃からアレクサンドリアで始まった文法研究の中で形成されてゆくのであるが、Dionysius Thraxによってまとめられる。そこでは8つの品詞が区別され、格・性・数・人称・時制・態などの文法カテゴリーが設けられる。この文法書はその後ラテン語に翻訳され、ヨーロッパ世界では中世・近世を通じて文法の雛形しとて踏襲されることになる。興味深いのは、音声と指向対象（référent）の関係から始まった言語探究が、次の段階で形態の分類に進むわけであるが、現在の研究の中心になっている統辞論は紀元前の段階では全く見られないことである。分類された語類がいかに結びつき、どのように文を形成してゆくかについて初めて言及したのは紀元後2世紀のApollonius Dyscolusである。

「文法を自覚しながら言語を使用する態度が、ことばを発するからといって人間の誰にでも備わっているわけではない。自分や他人の発する表現が正しいかどうかを批判的に考え、もっと理に適った表現はないかと工夫する営みには、絵画や彫刻や音楽や建築と同じような向上心と修練が不可欠である。」（「規範としてのラテン文法」逸身喜一郎）[1]

ある言語の文法を編纂するという行為は、文化的な成熟と強い動機が必要である。逸身氏の言うように、その動機は二つあった。一つは、文法誕生のお膝元であるアレクサンドリアで古くから行われていたホメーロス作品のテクスト照合作業である。成立年代が紀元前8世紀とも9世紀とも言われる彼の叙事詩は、その当時のギリシャ語―コイネーと言われる―とはすでに相当隔たりのあるもので、複数のテクストの中からどれがより古くオリジナルに近いかを判断するのは大変なことであった。彼の作品は当時のギリシャ人にとって「時に日常の倫理規範であり知識のソースでもあった」[2]ため、テクストの言葉は日常の話し言葉より崇高なものとして位置づけられ、結果として言語研究者が長いこと抜け出すことのできなかった話し言葉に対する書き言葉の優位が確立してゆくのである。

それに対して修辞学の方は、話し言葉を活躍の場にしていた。ギリシャ語のrhētorikēはrhētōr（弁論家）が用いる口頭弁論の技術であったため、〈弁論術〉〈雄弁術〉などと訳されることもある。古代ギリシャ的民主制の元では、様々な場面において相手を感動させ、説得し、自分に有利なように話を運んでゆく技術が要求された。紀元前4世紀のアリストテレスの著作を先駆けとするこの

技術は、文法の場合と同様に程なくローマ文化圏に移植され（ラテン語での名称は oratoria)、紀元後 1 世紀末に Quintilianus による『弁論術教程』の中で集大成されることになる。

彼によって確立された古典的レトリックは、発想(inventio)、配置(dispositio)、修辞（elocutio)、記憶（memoria)、発表（actio）の 5 部門からなるが、この中の〈修辞〉がその後に効果的な表現技術としての修辞学に発達してゆくことになる。中世においては、〈文法〉〈論理学〉と並んで自由七学科言語部門の一に数えられたが、この頃には重点が―印刷術の普及もあって―完全に書き言葉の方へ移っていた。書き言葉に重点が置かれることによって記憶と発表の部門は重要性を失い、発想と配置は論理学や文法の中に組み込まれてゆく。この流れの中で精密化してゆく修辞の技巧は、しばしば内容を伴わない空疎な文章を生み出したりしたため、古代ギリシャにおいてはプラトン、近世になってからはモンテーニュやデカルトなどの修辞に精通した人からも手厳しい非難を受けることになった。修辞に対するフランス語の訳語はラテン語直系の élocution であるが、英語は style である。修辞学は、近代の合理主義・実証主義そして新興の学問〈言語学 linguistique〉などの荒波にもまれ、19 世紀末にはついに力尽きヨーロッパの教育カリキュラムからも除外されることになるのだが、その後その内容の少なからぬ部分を引き受けたのが〈文体論 stylistique〉であった。(3)

I.

東京外国語大学フランス語学科研究室が中心になって機能主義理論の立場に立った論文集を刊行したのは、1990 年の 9 月であった。正式の名称は ***Recherches Linguistiques en hommage à André Martinet, à l'occasion de son 80e anniversaire*** で、本来、氏の 80 歳祝賀記念論集として企画されたものである。続く 90 歳祝賀記念論集も予定されていたのであるが、残念なことに氏が逝去され実現にはいたらなかった。

筆者は論集の中で、範列と選択の問題をそれまでどちらかというとあまり扱われていなかった〈文〉のレベルで論じ、これに Martinet 氏がどのような見解を示されるのかを楽しみにしていたのであるが、待てども何の反応も見られなかった。論集は主要図書館と氏宛に送られていたにもかかわらずである。

その理由がわかったのはかなり後になってからであった。刊行から 8 年後に論集の編集主幹である渡瀬嘉朗先生宛に氏からお詫びの手紙が届いた。以下は、渡瀬先生から論集の執筆者に対して送られた手紙からの引用である。

「どうしてこういう手違いが生じたのか。はっきりした事情はわかりません。マルティネさん自身の推量では、その頃（1990年の秋ごろ）、入院して手術を受けることになって、留守中、秘書の人が、小生の送った革表装の「記念論集」を客間の書棚に整理したようです。運悪く、その書棚は飾り書棚で、先ずは決して読まない美装の本を飾るためのものであったとか。そこで最近になりマルティネさんが、何かのはずみにその書棚の中の本を少し覗いて見る気になって漸く「記念論集」がそこに届いて置かれてあることに気づいた、ということであるようです。」

このような経緯で8年後に漸く日の目を見た論集に対して氏は、体調を崩されていたにもかかわらず急ぎ詳細な論評をお書きになり、それが翌号の学会誌 ***La Linguistique*** に掲載されることになった。その中から、筆者の論文《Choisir une construction : stylistique ou linguistique?》に関する部分を引用する。[4]

> Dans un survol assez rapide, Yukio ASANO cherche à replacer la construction impersonnelle du français dans le cadre de la recherche linguistique. Peu de linguistes sont tentés de le faire, tant ils sont convaincus, au départ, que le problème ressortit à la stylistique et ne peut les intéresser que très indirectement : dans les différents "modus" d'un même "dictum" qu'on nous présente pour un même énoncé, nos préférences, si nous en avons, sont en général dictées par le choix des formes ou le talent de l'écrivain pour mettre en valeur ce qui nous paraît le plus essentiel ou le plus séduisant. Mais ceci fait généralement intervenir la personnalité du lecteur plutôt qu'une valeur intrinsèque de l'écrit. C'est pourquoi à la question que pose le titre de l'article, "stylistique ou linguistique?", nous répondrions volontiers "stylistique" dans la mesure où les choix divers n'aboutissent pas.

氏のコメントがほぼ筆者の予想通りであったことにより、自分が氏の言語理論を基本的に正しく理解できていたという安堵感を得ると同時に、それ以上の積極的な支持が得られなかったという失望感も感じることになった。それはまた自身が目指しているものの独自性を改めて自覚させられることでもあった。

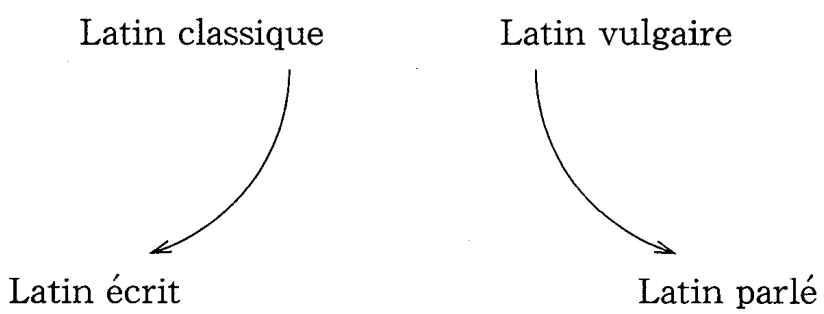
とはいえ、そのような独自性を含めた自身の理論が、氏の提唱してきた機能主義理論の延長線上にあることは紛れもない事実であり、そうであるならば—

層その齟齬と和解点を明らかにし、各々の可能性について考究する必要があるように思われるのである。

Ⅱ.

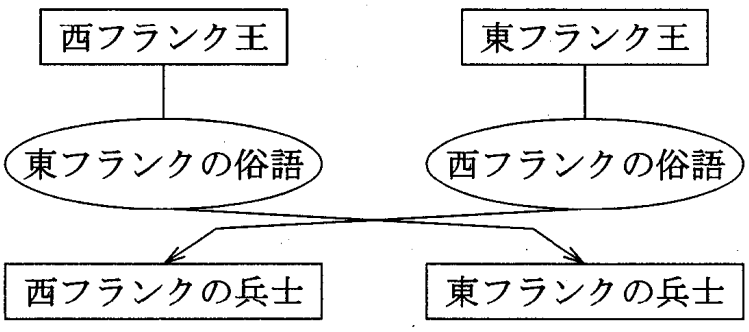
現在のフランス北部に歴史上初めて統一王朝を築いたのは、ゲルマン系のフランク人であった。彼らは主に政治的な動機から自らの言語を放棄し、既にキリスト教の公用語になっていたラテン語を新しい言語として採用した。この王朝はカール大帝（Charlemagnes）の時あらゆる面で最盛期を迎えることになるのだが、その後領土の分割などの過程を経て解体の道を辿ることになる。

5世紀末に採用されたラテン語は、数百年の間に大きな変質を余儀なくされる。第一に話し手の言語が元々かなり異質であったため、発音・語彙・統辞等各レベルにおいて最初から大きな干渉を受け続けた。現代フランス語が、同じラテン語を祖とする他のロマンス諸語と比べて大きく変化をしているのはこのためである。もう一つは当時のヨーロッパ全体について言えることであるが、カエサルの征服以降ガリアに移植されたラテン語が、元々異なる言語を話す話し手によって使われ続けることによって書き言葉としてのラテン語との差がますます広がり、8世紀頃には話し手自身がラテン語を話しているという意識を持っていたかどうかも怪しい状態になっていた。この傾向は、いわゆる〈カロリング・ルネサンス〉において（書き言葉における）ラテン語の純化が進められることによってますます顕著なものとなっていった。

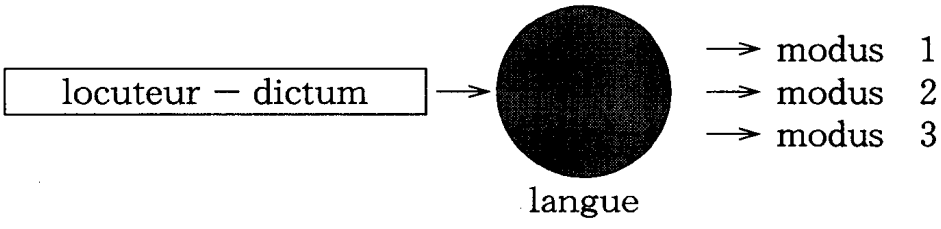


王国は843年に大帝の孫たちによって分割されることになるのだが、それに先立つ842年、西フランクを領有するシャルル2世と東フランクを領有するルートウィヒ2世が、中部フランクと北イタリアを継承することになるロタール1世に対抗するために、ストラスブールに会して互いの兵士たちに向けて声明を発する。その時、共通の言語であるラテン語を用いず、シャルル2世はドイツの俗語（teudisca lingua）で、ルートウィヒ2世はフランスの俗語（romana lingua）

で兵士たちに語るのである。そうすることの裏には、領土固有の言語を用いることによりナショナリスムを高揚することもあったのだろうが、そうしなければならないほど特別な教育を受けていない階層がラテン語を理解しなくなっていたこともあったのである。(5)



そこでは同じ内容を伝えるのに言語として幾つかの選択肢が存在した。同時通訳とか文学の翻訳が存在することからも、話し手や書き手が伝えたいと思う内容とその手段となる言語は独立したものと考えることができる。発せられる前の内容(以後 dictum と呼ぶことにする)が言語によって形成されるかどうかはここでは問題ではないし、その議論は筆者の力の及ぶところではない。大切なのは、話し手が何らかのメッセージを相手に伝えようとする場合、形をとる以前に dictum は原則的には決定されていて、それが言語というフィルターを通して実現するということである。(6)



今まで述べてきたことは、深く考えずに聞いているとかなり自明のことのように思えるのだが、現実的な理論を構成しようとする場合には枠にはまりきらない細かい事象にも気を配らなくてはならないだろう。王が兵士たちに伝えたいことは決まっていても、それをどのような表現でどのような順番で述べるのか、またそれらは何によって(または誰によって)決定されるのかについては少なくともいくつかの可能性が考えられるのであって、言語学者としてそれに

無頓着でいることは怠慢のそしりを免れないであろう。

Ⅲ.

氏の理論の根幹になっているのは連辞論（syntagmatique）と範列論（paradigmatique）である。前者は物理的現象として顕在する発話連鎖（chaîne parlée）を扱うものであり、後者は発話中の一点における潜在的選択肢の集合を問題にするものである。

連辞を扱う際に一番問題になるのは、単位の分割（segmentation）と線状性（linéarité）である。発声する側の器官やそれを認知する側の能力の制約から、自然言語は必然的に線的性質を帯びることになる。つまり、発話は切り離すことのできる単位の連続という形を取ることになる。そしてその単位は大きさによっていくつかに分けることができ、直接知覚しうる最小のものが〈音素 phonème〉である。

マルティネ氏は、「プラハ言語学派の音韻論から出発して、機能的・構造的言語学を、音韻論の枠をこえて発展させた」。また氏は、「言葉の機能性という点からみると、音素構造こそ、人間のことばが常に経済的にそして正確に機能することを保証する鍵である」[7]という考えから、有名な〈二重分節（double articulation）〉理論を生み出した。もちろん氏の理論は言語現象全体にわたる包括的なものであるが、理論のエッセンスが音韻レベルの観察から先ず生まれ、それが順次上のレベルに適用されるに至ったということは確かであり、重要な意味を持つ。この順序が、先に観察した文法の成立過程と類似することは興味深い。従って、もし我々が氏の理論を多少とも厳密に理解しようと思うならば、やはり音韻レベルから出発しなくてはならないだろう。

carpe の /p/ を /t/ に代えると carte という異なる意味の記号が得られる。そこから初めて /p/ , /t/ という最小の単位を連辞の中で分割して取りだし、これらが独立した一音であると言えるのである。より重要なことは、このような換入（commutation）の手続きにより異なる内容の記号が生み出されるという事実である。

二つの音声が同じ音であるとか異なる音であるとか言うことは、正書法の確立している言語においては自明のことのように思えるが、実際には厳密な手続きによってしか決定できない。英語の chew /tʃuˑ/ における /tʃ/ を /d/ に代えることにより do /duˑ/を、/z/ に代えることにより zoo /zuˑ/ という異なる記号を得ることから、/tʃ/ /d/ /z/ は同じ環境（すなわち /uˑ/ の前）に現れうる

別の単位である。また /tʃ/ を /t/ や /ʃ/ に代えることによりtwo /tuː/ chou /ʃuː/ が得られることから、/tʃ/ は二音から成っていることがわかる。日本語の〈茶〉 /tʃ-a/ などにおける /tʃ/ についてもを同様の操作を行うことが可能である。ところがスペイン語においては、/ʃ/ が単独で用いられることがない—つまり、/ʃ/ の選択は必ず/t/の選択を伴う—ため、/tʃ/ は一音である。[8]

Il dessine une carte.において、それを構成する各音素の選択・換入を考えることもできるが、一段大きな単位（記号素）で同じことを試みることもできる。carteにおける /t/ が /p/ などと音素レベルの換入クラスを構成すると同時に、carte 全体が carpe, robe などと形態レベルの換入クラスを構成するのである。同じ文において dessine が plie などの動詞と換入クラスを構成していて、後者が選択された場合、一段大きな〈文 phrase〉という単位に意味上の異変が起こる。つまり、音素の選択が記号素の意味を変え、記号素の選択が文の意味を変えるのである。不思議なことに、この興味深いパラレリスムについて明確に言及した事例を筆者は確認したことがない。異なるレベルの間の〈同形性 isomorphisme〉ほど理論の正当性を保証するものは考えられないであろうに。

Ⅳ.

機能主義理論の概念で誤解を招きやすいものに換入可能性（commutativité）がある。『ラルース言語学用語辞典』には、「…言語の様々な要素ないし要素群が同一構文中に入り得る適正を〈換入可能性〉という。例えば、chaise と fauteuil の換入可能性は大きい。chaise を受入れる大多数の環境は fauteuil をも認める。一方、chaise と table の換入可能性はより少ない…」[9]とある。この種の議論においてはいつもそうなのだが、換入される環境がどの程度現実的なものなのかが明確にされていない。

Elle s'assist sur une chaise. において table の換入可能性が低いというのは、Elle s'assit sur une table. という文で表される行為が行儀が悪いとか日常頻繁には起こらないという意味でしかない。ところが実際に彼女がテーブルの上に座っている状況があった場合には、その時には sur une table こそが一番適切な言表であり、chaise の換入可能性をとやかく言うこと自体無意味に思われる。fauteuil は可能性が高いといっても、chaise に座っている状況を全く異なる fauteuil で言い換えるのは現実の歪曲意外の何物でもない。

してみるとこの換入可能性の正体は何なのであろうか。それは、同じ言語環境に入れた場合、どれぐらい自然でもっともらしい（plausible）発話が生み出

されるかという指標であり、発話の現実的状況とは無関係である。ところが換入のポイントを提供する発話連鎖は、そもそも具体的な状況を伴った現実の発話そのものであったはずである。換入という操作がしばしば対立する単位を抽出するだけの手段になってしまっているのは、言語理論にとって有益なことなのだろうか。

換入可能性という概念を，音素とか記号素とか現実に知覚できる単位以外に拡張して用いる立場もある。プラハ学派のように音素を弁別特徴に分析して適用したり、イェルムスレウ Hjelmslev のように記号素を意味素に分析して実行したりすることからも、「換入可能性ということは、単位に固有なものと限ったわけではないことになる」(10)。つまり理論的妥当性を伴えば、いくら抽象的なものでも構わないということである。従って、ここでより大きな単位に進むことを妨げるものはこの時点では何もないことになる。

「より大きい構成体の構成要素にはならない構成体」とか「言表のすべての線分が、唯一の述辞、または等位におかれたいくつかの述辞と結びついている言表」(11)などと定義される文は、その形態の多様さとリストが事実上無限であることから扱いにくい物であるという印象を与えてきた。(文法の歴史の中でも長い間等閑に付せられてきたことは前述の通りである。)しかし今ここで重要なのは意味や形態面からの定義を下すことではなく、記号素や語群より大きくてまとまった内容を表す言表に、言語がどのような形式を用意しているかなのである。

V.

範列・選択・換入などの概念を実際の文脈の中で検証してみたい。

Mais voilà que l'on brûle les villages pour jouer le jeu de la guerre, de même que l'on démantibule les parcs, et sacrifie les équipages, de même que l'on engage l'infanterie contre les tanks. Et ① il règne un inexprimable malaise. Car rien ne sert à rien. (Sanit-Exupéry : ***Pilote de guerre.*** 数字・下線は筆者) (12)

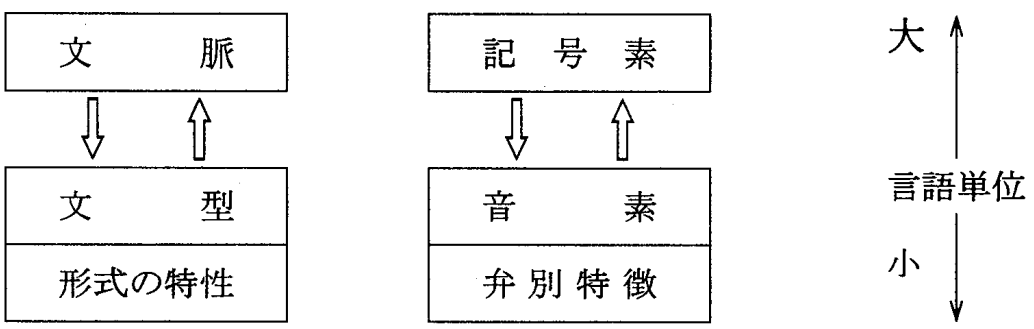
下線部はいわゆる「談話の非人称」で書かれているが、別の選択肢も考えられる。② Un inexprimable malaise règne. / ③ Règne un inexprimable malaise. ①～③の違いは語彙レベルの物ではない。①は一要素多いが、その内容は零である。②③は全く同じ要素からなっているがその順番は異なり、ニュアンスも

違う。これらの間のニュアンスの違いは、各要素の相対的位置から生まれている。言語における〈位置〉の重要性はマルティネ氏も認めている。

> ... la valeur de la position respective des éléments dans la chaîne parlée (la syntaxe) fait partie de l'organisation linguistique qu'on postule chez tout membre de la communauté, au même titre que les faits paradigmatiques. (13)

実際この文脈においては②も③も不可能ではないと思われる。意味内容が同じなのだからそれも不思議ではない。ただニュアンスとか前後のつながりとかが、変化したり不自然になったりする可能性がある。重要なことは、作家がこの場所で敢えて①を選んだということである。それは彼が、ここでは①が最も文脈上適切で自身の表現意図をよく表していると判断した、ということを示している。また①～③のいずれかを選択することにより、その影響が文より大きい単位である〈文脈〉に及ぶのである。

音素がより小さい単位である弁別特徴（trait distinctif）によって区別され、その選択・換入の結果がより大きい単位である記号素に影響を与えたことを思い出そう。ここには見事なまでの平行関係が見られるのである。



VI.

以上の観察から、文型の選択は氏の理論の枠内に収めて何の違和感もないどころか、音韻レベルとの整合性を考えればまさに統辞論の枠内で扱われるべき問題と結論せざるを得ない。それにもかかわらず、とかくこの問題が統辞論より文体論に属するように言われてきたのはなぜだろうか。

構造主義的観点を導入することにより文体論に現代的意味を持たせたのはソシュールの弟子でもあったバイイだが、その後この学問は言語学に統合される

よりはその補助学問として扱われてきたように思える。氏の論評の中にも、このレベルの選択には「内在的価値 (une valeur intrinsèque) よりは話者の個性 (la personnalité du locuteur) が介入」してくるとあるが、この personnalité という言葉が常に文体論につきまとう。個性は langue ではなく parole に属し、従って言語学プロパーの対象ではないと言うのである。

だが今まで見てきたように、文型の選択は範列論の諸原則に適い、それぞれの差違は〈位置〉という「共同体のすべての成員に共通の言語組織の一部をなす」基準によって生み出されているのである。これは紛れもなく言語学で扱うべき問題であって、このレベルまで含めて記述・説明してこそ包括的な文法理論と呼びうるのである。これまで漠然と統辞論の名の下に行われてきた研究領域は、実は明確に区別されるべき二つのレベルを含んでいる。文内の操作を文脈とは切り離して扱うものを micro-syntaxe と、このようにより大きな文脈との相互影響を考慮に入れて進まなくてはならないものは macro-syntaxe と呼ぶことを提案したい。(14)

筆者は、氏の言語に関する膨大な知識を背景にした深遠な哲学の本質を理解しているなどと自惚れるつもりは毛頭無いが、氏自らが構築してきた言語理論が、他のいくつかの言語理論と比較した場合、統辞レベルでの成果が今一歩満足のできるものでないと指摘されることもあった。機能主義理論はもっと上のレベルでも高い可能性を持っているはずなのだが、一つには厳密すぎる二重分節理論から出発したことがある種の足かせになったことは否定できないだろう。

【註】

(1) 月刊『言語』2002 年 4 月号、p. 66。

(2) Ibid. p. 69。

(3) 18 世紀の終わり頃ドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリス Novalis が〈表現術〉の意味で用いているこの語の起源は意外と新しく、1872 年にドイツ語からフランス語に借用されたらしい。なお、この語に近代的な意味を付与して広めたのは、ソシュールの弟子であったバイイ Ch. Bally である。

(4) 1998 年 1 号、p. 44。

(5) この点に関しては浅野 (1997) を参照。

(6) dictum, modus という用語はバイイ (1950) による。

(7) 『平凡社大百科事典』〈マルティネ〉の項より引用。

(8) 例えば cruche の語頭音/ kr- /は、ruche と対比されることによって初めて独立した二音であることがわかる。

(9) p. 60.

(10) 『言語学事典』p. 317。

(11) Ibid. pp. 138-139。

(12) Editions Gallimard, p. 81。

(13) 《Le choix du locuteur》, p. 276。

(14) 俗に〈文内文法〉とか〈談話の文法〉とか言われることもあるが、全体観に基づいた命名であることが好ましいであろう。

〔参考文献〕

Bally, Ch. : *Traité de stylistique française*, Paris, Klincksieck, 1909.

— *Linguistique générale et linguistique française*, 2eéd., Berne, Francke, 1950.

Martinet, A. : *Eléments de linguistique générale*, Paris, A. Colin, 1960.

(『一般言語学要理』三宅徳嘉訳、岩波書店、1970)

— 《Les coix du locuteur》, *Revue philosophique* 40, 1966.

— *A functional view of language*, Oxford, Clarendon, 1962.

— *La linguistique : Guide alphabétique*, Paris, Danoël, 1969. (『言語学事典』三宅徳嘉監訳、大修館書店、1972)

— *Syntaxe générale*, Paris, A. Colin, 1985.

— 《Recherches linguistiques en phonologie, syntaxe et synthématique par un groupe de chercheurs japonais》, *La Linguistique : revue internationale de linguistique générale*, vol. 34, Paris, puf. 1988。

浅野幸生：《Choisir une constructuin : stylistique ou linguistique?》, *Recherches Linguistiques*, Tokyo, 1990.

— 《古仏語における従属節の語順に関する一調査》、ロマンス語研究　30、1997。

逸身喜一郎：《規範としてのラテン語文法》、月刊『言語』、2002。